
届かない手紙

紗芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

届かない手紙

【Nコード】

N2500W

【作者名】

紗芽

【あらすじ】

郵便局で見知らぬ女性に一目惚れした「俺」。この女性にはどうしても届けなくてはならない手紙があるのだが実は宛先の住所が存在しないものだった。ひょんなことから「俺」と友人Aは女性とともに手紙の届くべき場所へ足を運んでみることにした……。

亡き祖母から預かった大切な想いと「俺」の想いは届くのか。小さな”縁”のお話。

俺は今、郵便局内にて好みの女性を発見した。

クラスの女子から漂うのと同じ甘い匂いに反応して顔を上げると前を颯爽と横切って行ったのは、靡く黒セミロングヘア。まさに俺の好きな髪型だがなにより少しだけ見えた横顔に強く惹かれた。こんなにも俺の「ハート」を鷲掴みにする奴なんてそうはいないって。背丈は高くないけどヒールをカツカツ言わせて背筋を張って歩く姿は堂々としている。彼女を目で追っていると肩を軽く叩かれた。

「何してんの」

女性に夢中で気がつかなかったが振り返ると馴染みの友人が居た。彼とはいっても学校でつるんでいる内の一人で家が近所なだけあって幼稚園時代から遊んでいる仲だ。クラスでは皆を盛り上げるリーダー的存在ではある俺でも実は打たれ弱いことも知っているし俺はこいつが7割人の話を聞かないことを知っている。普段、クールだけど愛想が良いと女子にちやほやされているのを見ると「返事はしてるけどあのそっけなさほは心ここに在らずだな」とにやけると同時に羨ましく思う。僅かだけど。よし仮にAとしておこうか。Aは俺じゃない遠くの方に視線を向けたまま話しかけてきた。

「あー確かに君が好きになっちゃいそうな女性だね。早速口説きに行けば？ 3日前だっけ？ 振られた時にぽっかり空いた心を埋めてくれるかもしれないよ」

「う、うるさいな。あれはあの日は俺に運が無かっただけさ」

「運が無かった？ あの日君の運勢は絶好調だったじゃん。ご丁寧

にラッキーカラーのゴールドを身につけようと何故か金色の折鶴をポケットに忍び込ませて自信あるって鼻息荒くしてたくせに」

Aは口角を上げて笑う。

「タイミングだよ。タイミングが悪かったんだ。もう少し彼女とたわいもないお喋りをしてからベストなタイミングを図って告るべきだった」

「タイミングねえ。君は我慢を知らないから難しい課題だね。あ、その前にさ、俺に頼らずお近づきになれる男にならなきゃじゃない。ハートを鷺掴みされる回数が多くて俺困っちゃうよ」

そう言って大げさに竦んで見せるAに一発拳をお見舞いしてやろう。

「だああもう先からごちゃごちゃ上から目線でもの言いやがっ——」

その時だ。奥でバンっという思い切りテーブルを叩く音が郵便局内に響き渡った。次に女の叫び声。

「なんでまた返ってきちゃうのよ！ 本当にちゃんと届けてんの！ 住所は合ってます！ 何回言ったらわかるわけ？」

あまりの大声に一瞬身が縮んだ気がする。周りにいる人たちも不安そうな色を浮かべて怒号の女を見遣る。俺もそちらを見たが、なんとその女というのは俺の——、

「あの人って君のハートを鷺掴んだ人じゃん」

「そう、みたいですわね……」

ああそうか。俺は何かとんでもない力にハートを引っ張られてしまったようだ。正直に言おう、俺はチキン……なのかもしれない。どんだん体から力が抜けて且つ冷えていくのを感じる。

「熱いハートがチキンに早変わり」

「お前に言われるとすげえ腹立つ」

「チキンで声に出して言ってみるとほんとニワトリっぽく見えるね」

「はぁ？　なんだと……」

「お、こっち来るよ」

いつの間に、カツカツと音が近づいてくる。さっきより遥かに早足で過ぎ去って行ったがやっぱり堂々とした姿勢と凛とした横顔は違わなかった。すっかり後姿に見とれていると、

「行こうか」

なんと俺の腕を引っ張りながらAは自動ドアに向かって進んで行く。

「おい離せよ！　急に何だよ」

「これ大事な物だと思うよ。定期券じゃないかな」

郵便局を出た途端腕を離す代わりにずいと差し出されたのは茶色のパスケース。どうやら彼女が落して行ってしまったらしい。

「どうせなら君が渡してくれば？ あ、すみませーん」

「は、お前いきなり」

呼び止められ振り返った彼女の顔には先ほどの怒りがまだだいぶ残っていた。ベタに、眉間に皺が寄り、細めた目は俺をこのまま悪い意味で失神させそうなほど冷たい。俺が魅入られ……いやただ硬直しているのを良いことにAは俺の背中を押した。ああ、背中を押してくれるのは何もこんな時じゃなくていい。

「何」

俺は情けないことに何も答えられなかった。頭の回転が急にスピードを落とし、“聞かれたら答える”という簡単な作業さえ滞ってしまった。

「今茶色のパステース落としましたか」

代わりに横からAが得意の笑顔を張り付けて言う。その間に「おい」と小さく脇腹を小突かれたので俺は思わず呻き声を上げてしまった。

「う……これ」

なんとそっけないんだ俺は。Aじゃあるまいし。

しかし彼女は俺の差し出したパステースを見ると「あ」と声を上げ、それからみるみる顔が綻んだ。

「ありがとう……！ 落としてたなんて気がつかなかった」

すっかり皺は解消され見開いた目はとても大きかった。至近距離の

せいか、あの甘い匂いが強く鼻をかすめる。良い匂いだとにやけそうになった時彼女が目の前にいるという事実に関が熱くなるのを感じた。Aは横でそんな俺を見て楽しんでるようだ。まるで「また俺が助けてあげちゃったね」と言っているような勝ち誇った目で。

「なんだよ」

「別に」奴はそう言って口角を上げた。

なんとなく恥ずかしい気持ちを紛らわそうとAを精一杯睨みつける。すると、ねえ、と控えめな声俺たちの間に入ってきた。すかさずAは元の得意顔に戻り紳士的に応え、俺はというと未だ彼女の顔すらまともに見れないしAの前というのがあってどうしてもそっぽ向く感じになってしまう。

「ウエヤマアキノブって人知ってる？ この辺りに家があるはずなんだけど」

「ウエヤマアキノブさん、ですか……」

「『植える』に『山』と書いて植山だよ」

Aは分かりませんと首を振る。大抵の物事には頼りになる彼もこればかりはお手上げのようだ。こいつは自分の興味あるものの他は知ろうとしない。頭が良くて無駄……いや豆知識も豊富な割に、町に愛着が無いせいか住民に対する記憶力が無かった。俺は一応地元民として知っている限り名前を思い浮かべてみた。俺の家には情報通の母親と祖母ちゃんがいる。リビングにいますとよく何処其処の誰がどうしたっていう話を耳にするもんだから何となく町の住人の名前と顔と家が分かるようになっていた。特に柿の木がある家々は小学生の時から把握済み。……さあ、どうだろう。「植山」という苗字

は今まで一度も聞いたことが無いみたいだ。まだリビングの話題に上がるほどの人物じゃないからか。

ふと彼女と目が合う。俺は慌てて逸らして答えた。

「俺も……知りません」

「そっかー。ここで合ってるはずなんだけどなあ」

彼女は肩を落としてしまった。残念そうな表情を見て力になれなかったという罪悪感が込み上げてくる。内心で舌打ちしていると、Aが口を開いた。

「あの、もし宜しければその封筒、見せていただけますか」

「いいよ、はい」

受け取った封筒を覗き見る。色は薄いピンクで全体的に少し斜めな字面で住所と宛名『植山昭信様』が書かれている。

「3251ってどこなんだ」

「たしか高校辺りが3000だった気がする」

この町の住所は町名と4桁の数字という大変分かりやすい組み合わせなので1桁目の数字が分かっているればどの付近か見当がつく。ただしAは別だが。

「何度も送っているのに返ってきちゃうの。その住所が存在しないからって」

「じゃあその住所が違っているんじゃない」

「それは無いよ。だってちゃんとその住所通りに家は建っているんだもん」

「……？」

俺とAは顔を見合わせた。そこに家はあるのに住所が無いってどういう事だ？

「行ったことあるんですか」

「無いよ、私はね。でも私のお祖母ちゃんは毎月手紙を出していたし、今みたいに返ってきたことは無いの。……あ、言い忘れてた。あのね、この手紙お祖母ちゃんのなんだ。本当は自分で届けたかったんだけどもう無理だからって私に託してそのまま死んだの。お祖母ちゃん曰くちゃんと家は残っている、それに昭信さんを知る人が必ずそこに居るって」

でもやっぱりただの夢だったのかな。最後にそっと呟いた。

「行ってみる？　そこへ」

気付けば俺は口走っていた。頭より口先が勝手に動くのは毎度のことだ。そして言うてからすぐ後悔するのも――。

＊

彼女の「行きたい」の一言で俺たちは手紙が届くべき場所へ向かう

ことになった。今まで俺は後先考えずに口出ししてその度怒られたり振られたりしていた。ただの恥晒しだから具体的には言えない。ところが今回は逆に賛成してくれたのだ。しかも惚れた女に。Aもすんなり頷いたからむしろなじらなかったことに驚きを隠せないでいる。

「たまにはまともな意見を言うよね」

「どうしてお前はいつもそういう褒め方しかできないんだよ」

「あれ、今の別に褒めたわけじゃないんだけど。褒めて欲しい？ すっごーい。俺でも思いつかなかったよ」

ああああ殴りてえええ

「どうせ俺が“うるせえ” つってたら“せっかく褒めてあげたのに” って言ったんだろ」

「うん。よく分かってるね」

Aとは伊達に幼稚園時代からの付き合いじゃない。この手のパターンが数種類あることは互いに良く知っていた。それなのに飽きが来ないのは「良い天気だな」から下掛かった話題まで気兼ねなく話せる相手だからだろうか。ただし俺より5センチ背の高いAに何を言われても見下されているか遊ばれているようにしか思えないのが癪だ。この不毛な会話を、一足前を歩く彼女は笑って聞いていた。でもどうして案内する俺らより前にいるんだよ。どうせなら俺の隣……なんて考えていると彼女が振り返った。

「二人は仲が良いね。漫才聞いているみたいで面白いよ」

ああ私はちゃんと褒めてるんだよとウィンクされると、やっぱり俺の目に狂いは無かったと改めて魂に火がついたように内側から熱いものが込み上げてきた。

「顔真っ赤。初心だなあ」

耳元で小さくツツコミを入れるな。

「二人は」

彼女に尋ねられた。この先本当に住所通りの家があると思うか、と。

俺はその質問が疑問だった。

「何で？ お祖母さんが実際に手紙を送ってたんだからあるんじゃないの？」

「そうだよ。でもお祖母ちゃんが手紙を送っていたのって私が中学生の頃くらいであれから数年経ってるし……。もう引越してる可能性だってあるかもって」

「でも郵便局の職員は“そんな住所存在しない”と言う。もし本当に引越したのであればすでに家も取り壊されているのかもしれない。ひとつ訊いてもいいですか」

Aは手を挙げた。

「……どうしてお祖母さんが亡くなった後すぐに手紙を届けなかったんですか」

彼女はよくぞ聞いてくれたねと急に明るい口調で話し始めた。

「お祖母ちゃんてね、ロマンチストなところがあって」

ロマンチスト。声に出すと少し恥ずかしくなる。

「若いころはお伽噺に出てくるような恋愛が本当にあると信じていた……うん、思っていたんだって。だからこそ昭信さんに出会えたことは一生の宝と思える素敵な、お祖母ちゃんの言うところの本物の恋愛ができた。でも決して付き合えたわけじゃなかったんだ。お祖母ちゃんが女学生時代に一目惚れしたんだけど、その当時って若い男女が簡単に交際やまして話す機会さえ殆ど無かったって聞いたことあるでしょ。だからお祖母ちゃんたちも初めはそれきりで終わってしまったの。でもね、二十歳になってから偶然再会したんだ！　きっと神様が縁を切り離さずにいてくれたからでしょうなんて言ってるね」

お祖母ちゃんはここからいつも嬉しそうに話すんだ。そう言って続けた。

「でもお互いもう結婚していて結ばれる未来は無かった。だからお祖母ちゃんは手紙にその想いを綴ったの。一度も返事は無くて、ずっと書き続けた」

「一度も返事無かっただって？」

「うん。その時は実際に送ってはいなかったから。本当に送るようになったのは私が生まれる少し前だったみたい。それで質問の答えなんだけど、お祖母ちゃんが昭信さんと再開して彼に対する恋心が

尽きていなかったのを確かめられたのがハタチだから私がハタチになる時について考えたんじゃないかな。詳しいことは何も教えてくれなかったし訊かなかったからよく分かんないけど」

孫にも“ハタチの縁”があることを信じているってことなのか。俺には結局お祖母さんの手紙の意図が良く分からないが、もし彼女に縁があるのならその相手に俺は是非とも立候補したい。顔の大部分が緩みかけたころ、Aが「ここだ」と言った。

＊

世の中、知らないことがたくさんある。そして知らなくていいことも、知られたくないことも同じくらいある。

特に私のお祖母ちゃんは教えてくれなかった。託すだけ託して、肝心なことは何一つ言わずに死んでしまった。たぶん知られたくない部類に入るのだろうな。目的の場所へ着いたけれどそこには家なんか建っていなかった。さっき彼が言ったように取り壊されてしまったのかもしれない。誰も手つかずのようで雑草や名前も知らない（元々植物には詳しくないけど）木が伸び放題だ。とてもじゃないけど奥へ進んで行くことは難しい……。

「一応売り地だったんだね」

背の高い方の高校生が地面を指差す。わずかに売地と読める看板が土まみれになって落ちている。

お祖母ちゃん、本当にここで合ってるんだよね。やっぱり私がハタチ過ぎたら届けろって、遅かったんじゃない。

私はポケットに入れてある写真ケースを握り締めた。

「なあこれってポストっぽくない？」

茶髪の高校生が見ているのは木で造られた箱。百葉箱みたいに屋根が付けられちようどそれくらいの大きさ、一本の脚で支えられている。

「そうだよ、ここよく見てみるよ。『堀』とか51って住所書いてあるよ。もう消されてるみたいだけどさ」

私は鼓動が高鳴るのを感じた。まだ終わっていないような気がして見つけた彼も少し興奮しているように見える。

「中、開けられる？」

「いや、鍵が掛ってるみたいで……」

「この木はだいぶ痛んでいるから古いようだけど、鍵はまだ新しいんじゃないかな。ほら、まだ錆びてない。誰かが後で付けたのかもしれない」

「それって、これが今も使われているって事だね。じゃあこの辺りに昭信さんを知っている人がいるかも」

「きつとそうですよ！……っと言っても近所って隣くらいしか近くに無いや」

「とりあえずそこに行ってみましょう」

私たちは隣へ歩いた。この家も木が多くて建物が良く見えないけれどちゃんと庭の手入れは行き届いている様子。

門扉の横にあるインターホンを鳴らした時、後ろで「あ」、続いて「どうした」という声に振り返ろうとしたところで家主の声がインターホン越しに聞こえた。

「どちら様ですか」

「あっ、ちょっと聞きたいことがあるんです。あの、この辺りに植山昭信という人は住んでいませんか」

暫く沈黙があった。「あの」と言いかけたとき、向こうから「この辺りには居ませんが、その人のことはよく知っています」と返ってきました。

「え、知っている……」

「その人は私のお祖父さんです」

はつきり耳に届いたのか、問答していた少年二人も私の方を見る。

詳しく聞きたかったので無理言って家に上げてもらうことにしたけれど相手の承諾した声は渋々……といった感じに思えたので何となく申し訳なかった。長身の高校生もどこか浮かない顔をしている。

さていざ顔を合わせてみると頑固なオジサンイメージとは違い自分と同じ年くらいの若い人だったので少し肩の力が緩んだ。ただし表情は硬く、愛想の一つも無い。作業場のような部屋に案内されるとそこにはキャンバスと潰れた絵具のチューブが辺りに転がっていた。強烈な絵具のにおいに思わず鼻を摘む。茶髪の高校生も臭えと声に出し、もう一人は私たちの一歩後ろで平然と辺りを見回している。彼にテーブル椅子を促されて座る。

「ここで絵を描いてるんです。趣味と一応仕事で」

彼はテーブルに三人分の紅茶を用意しながら言った。最初より抑揚のある声なのは気のせいだろうか。

「まさか宏太郎君だとは思わなかった。彼女の知り合いだったんだね」

「いや、たまたま道で会っただけですよ。その茶髪はおまけで」

「なんだと……！」

彼と背の高い高校生は知り合いだったのね、色々納得。それから私は二人の名前すら聞いていなかったことに今更気付いた。

どうぞ、と淹れた紅茶を勧められたのでティーカップを手にする。

「それで、祖父にどんな用事があるんですか」

「えっと、昭信さんにこの手紙を届けたいんです。私のお祖母ちゃんが書いたもので、私が二十歳になったら届けるように言われました。あ、でも私すっかり忘れててもう一年過ぎちゃっているんですけどね……」

最後は笑って誤魔化したけれど渡した手紙を見つめたまま彼は動かなかった。顔を覗いても何を考えているのか全然分らない。

「あの」

「ああ、やっと届いたんだ」そう言っただけは椅子から立ち上がると、段ボールや道具箱が積み重なった一角から、一つの木箱を取り出して蓋を開けて私たちに見せた。その中には私の手紙と同じ、ピンク色のシンプルな封筒がたくさん入っている。

「これは、祖父宛てにある女性から届いた手紙です。差出人は全て同じ、『岩崎しづ子』」

「お祖母ちゃん！」

私は叫んだ。お祖母ちゃんが生前昭信さんに宛てた手紙をここで見ることが出来るなんて……！ ほら、見てよお祖母ちゃん。

私はポケットから写真ケースを出した。

「それがお祖母さんなんだ……って若くないか」

高校生がびっくりするのも仕方ない。だってこのお祖母ちゃんはハタチの時のお祖母ちゃんなのだから。色褪せてはいるけれど、中の女性はこちらに向かって微笑みを湛えている。私が知るお祖母ちゃんのようなお団子に纏めた髪型ではなく当時は肩にかかる程の長さしかなかった。そう、丁度この頃に二人は再開を果たしたのだ。

「これはお祖母ちゃんが二十歳の時に撮った写真だよ。手紙を届けて無事に返事が届いたらこのケースに入れて仏壇に飾るつもりだったんだけど、肝心の手紙が届かないから一緒に連れてきてあげたの」

「それじゃあ、もしかして初瀬さんがポストに鍵を付けたんですか」

宏太郎君が言うまでポストの事をすっかり忘れていた。

「うん、そうだよ。一年前までは開けて待っていたんだけどついに来なかったから、諦めて鍵をかけてしまったんだ。鍵を掛けたのは単純にいらぬ広告がよく入っていたからで」

「住所も」

「そう、本当はすでに住所は抹消されているんじゃないかな。けどこの住所じゃないと届かないって祖父も言っていたから」

「待っていた？ この手紙を待っていたんですか」

「ええ、しづ子さんからの手紙をずっと待っていました」

私は激しく後悔した。結局は自分が一年間忘れていたせいで届かなかったのだ。先ほど郵便局で怒鳴ってしまった事を思い出すと恥ずかしくなり、顔がじわじわ熱くなってきた。

「一年忘れてごめんなさい！ 私のせいでした」

必死で頭を下げる私に良いですよ、と声を掛けてくれる。

「私も最近まで祖父の事自体知らなかったんですから」

「え」

「祖父の遺言どおりにしてただけで、手紙の経緯やしづ子さんという人については全く……。一番知らない事は自分の祖父ですよ」

彼……初瀬さんはどこかたびれたように椅子に腰かける。

「祖父は私がまだほんの、小学校に上がるか上がらないかの時に亡くなったそうです。母方の祖父で、一緒に暮らしてはいなかったの
で正直会った記憶はありません。小さかったですからね。」

……それから私が大学在学中、一人暮らしの私のもとに突然実家から電話がありました。それは、私に宛てた祖父からの手紙が見つかった、と言われ送って貰い読んでみると、『しづ子という女性から手紙が来るはずだ。お前が学校を卒業し仕事を始めたくらい大きくなったら書いてある住所のポストに届いたピンク色の封筒を受け取ってくれ』」

初瀬さんは一息入れてから続きを読んだ。

「『受け取ったら、ポストの屋根を開けて中に入っている物を彼女に送きなさい』」

私たち三人ははっと息を飲み込んだ。そして居ても立っても居られないという調子で作業場から出て行こうとした。

「あの屋根、開くのね」

「お祖母さんもだけど面白いお祖父さんですね」

「あー」

小走りになり出した所でまだそこに立ったままの茶髪君が初瀬さんに何か聞いているのが聞こえたけれど一刻も早く中身確かめたいと思う気持ちが強くて彼らを置いて先に向かった。

「ずっと気になってたんだけど、その布が掛ったやつってどんな絵なんですか」

「ああこれ、実は――」

布を取り払うと出てきた絵は男女が向き合っていた。茶髪の高校生はすぐに分かった。この二人はあの二人ではないか。それを私は知らない。

ポストの屋根を開けたのはいいけれど、中身はだいぶ色褪せてしまった黄色のリボンのみだった。

「幸せの黄色いリボン……？　てところですか」

「うーん。お祖母ちゃんには二人で撮った写真を受け取って言われていたんだけどなあ」

「写真はありませんね」

後から駆け付けた初瀬さんと茶髪君にも写真について言ったら、初瀬さんは「そうか、そこまでは私も聞いていないので」と言った。

「なんだ無かったんだ」と言うわりに全く残念そうに聞こえないのはどうしてだろう。

ごめんねお祖母ちゃん、写真は受け取れなかったよ。もしかしたら昭信さんの返事の答え……とかちよつと悲しいこと考えちゃったり。

でも私、今まで約束通り手紙の内容は読んだことないから実際は分

からないんだけどね。

そう、結局私も初瀬さんがお祖父さんを知らないように、私もお祖母ちゃんの恋愛談なんてほとんど聞いたことが無かった。ただ、昭信さんと約束してねえという言葉は口癖のようで、私はお祖母ちゃんに会う度聞かされていた。その時の表情が一番幸せそうでちょっと羨ましいとさえ思っていた……。

黄色いリボンを写真ケースに巻きつけると、私たちは初瀬さんと別れた。きっとこれでも良かったんじゃないかな。

「結果的には手紙が届いて良かったな」

「二人が何を望んでいたのかはよく分からなかったけれど」

「なんとなく分かるよ」

ポケットにしまったケースに触れる。幸せの黄色いリボンか。さすがお祖母ちゃんが惚れた相手だな、なんて思う。

「あ、ところで宏太郎君はさっき家に上がるの嫌そうだったけど」

「……気に入ってる場所に他人が入ってくるのが嫌だったんです。自分の見つけた隠れスポットみたいな所ってあまり知られたくないでしょ」

「うーん、たしかにそうかも」

「そういえばお前絵画に興味あるって言ってたよな」

「そう。……そういう君は、どうしてもにやけてるのかな」

「えっ、そ、そんな事はないだろー」

「と言いつつ岩崎さんをちらちら見てるじゃん。惚れたくせに」

「は……！ 馬鹿何言ってんだよ！」

もちろん二人の会話は聞こえていたけれど知らないふり知らないふり。宏太郎君は容赦無く彼を追いつめていく。

「もうバレバレ」

「う。でも、にやけちゃうのは他にあるからだなきっと」

「何それ」

布が掛ったキャンバスに描かれた二人の向き合い微笑む姿を私は知らない。

＊

「ありがとう、二人とも」

彼女は深々と頭を下げた。Aの野郎——宏太郎はいつものように紳士的スマイルで応じる。やっぱりこいつはイニシャルですらないAで充分だったと未だに思うんだけどな。

「実は家に行くことをためらってたんだ。でも一緒に来てくれて良

かった。お祖母ちゃんに良い報告ができそうだよ」

ここまでちゃんとはっきり褒められたことなんて人生のうちであったろうか。またしても俺は顔のにやけが止まらなくなってきた。

隣で宏太郎が俺に目線を送る。これは「連絡先でも訊けば」と言っている……。

俺は意を決して口を開けたが、現実残酷であると思い知らされる。

「お祖母ちゃんのように私も勇氣出して頑張らなくちゃね」

彼女には好きな人がいて、手を拱いている状態だという。

駅前で手を振って別れた後も暫く放心状態の俺。そんな様子を見てAは慰めの言葉を掛けるが、いつもとパターンが違いすごくまともな言葉であった。

「きつとき、君にもあるんだよ。合縁奇縁が」

「アイエンキエンてなんだよ」

「……」

「そういうのは俺に頼らず自分で調べることから始めてみようか」
どうやらブチ壊したのは俺の方みたいだ。

「ああー、くっそおー」

俺はわけが分からなくなって、でも自分だけ良い物を目にする事ができた嬉しさも混じり、なんとなく駆けだした。

――図書館に向かって。

届かない手紙／完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2500w/>

届かない手紙

2011年10月9日14時57分発行